



Special Features / Engineering's Heritage III Beyond the Years of our Life China

東洋のベネチア「蘇州」

中国・江蘇省蘇州

特集
土木遺産III
悠久の時を超えて 中国

国際航業株式会社 経営企画本部/経営企画部/広報G長
阪口直人
SAKAGUCHI Naoto



1—完成度の高い城郭都市

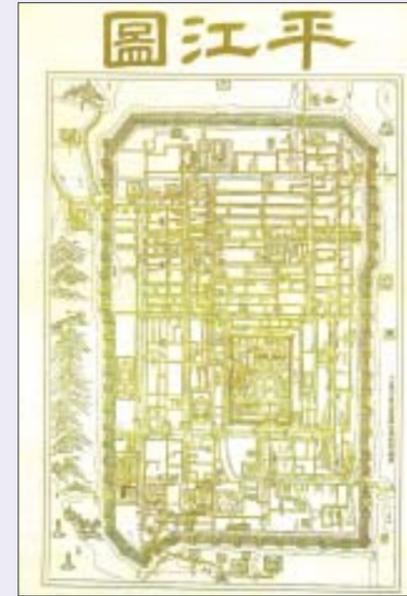
蘇州は江蘇省の南東部、長江下流のデルタ地帯に位置する江南地方を代表する水郷都市である。北は長江に臨み、西は中国三大水湖の一つ、太湖に面している。多くの湖沼と網の目のような河川と運河が醸し出す美しい景観は、多くの観光客を吸い寄せる。

13世紀後期、この地を訪れたマルコポーロが、故郷ベネチアに似た美しい都市と賞賛したことから“東洋のベネチア”と称されるが、歴史はそれより遥かに古く、新石器時代にはすでに集落があったとされている。都市としてはBC514年呉王・闔閭が宰相の伍子胥に命じ、周囲23.5kmにおよぶ城壁と8つの城門からなる城郭都市「闔閭大城」を築いたことに始まる。春秋時代(BC770～BC221年)後期には、呉の都・呉州として形が整えられた。さらに隋代の589年、文帝が江南に覇を唱えていた陳王朝を滅ぼすと、呉州は「蘇州」と改められた。このように蘇州は、優れた景観だけでなく、2500年以上の年月を経た中国を代表する城郭都市としても名高い。

初期の蘇州を知る手掛かりは少ない。しかし宋代の1229年に、蘇州の郡守吏李寿明が作成させた蘇州最古の都市図「宋平江図」を見ると、古城の規模、城門や塔・建物の配置などが、古代の文献にある闔閭大城と概ね一致することから、築城当初から現在とほぼ同様の骨格だったようである。宋平江図は、今なお地図として十分に使用に耐えることから、闔閭大城は非常に高い完成度だったことがわかる。太湖と陽澄湖に挟まれた高台にあり、「蘇湖熟、天下足」(蘇州・湖州の作物が実れば、天下を賄うのに足りる)といわれる肥沃な後背地を持つ地理条件は、よほど理に適っていたようである。2500年前にこの地を選んだ闔閭の慧眼に驚かされる。

2—運河が支えた蘇州の発展

蘇州の発展に大きな影響を与えたのは「京杭運河」の建設であった。随の煬帝が605～610年のわずか6年の間に、長江・淮河・黄河・海河の四大水系を結んだ京杭運河は、全長2,500kmにも及ぶ世界史上最大級の運河



■図1—1229年に作られた宋平江図

である。京杭運河は、江南地方の豊かな農作物や特産の絹・銅器・海産物などを随の都・洛陽に運ぶ手段としてはもちろん、陳王朝滅亡後の江南地方に対する支配力強化のために掘られたといわれている。

運河は長江から蘇州の西側を巻くようにして杭州へと続いており、蘇州とは「外城河」と呼ばれる城壁沿いの運河で繋がっている。運河は蘇州を含む江南地方一帯を、物資の重要な集散地へと押し上げた。その後、宋代(960～1279年)の造船・明代(1368～1644年)の絹織物生産などの商工業都市として、一方では温暖で風光明媚な土地柄ゆえ、地方官吏や豪商・地主たちの隠居地として発展した。彼らは隠居生活に花をそえるべく、自家庭園を建造し文人たちを招いた。これが世界に名高い中国古典園林であり、蘇州の懐の深さとなっている。

3—工夫のこらされた蘇州古城

蘇州市の総面積は8488.42km²と広島県とほぼ同じで、日本の行政単位からすればかなり広い。市街地は6行政区392km²で、このうち「蘇州古城」といわれる旧市街は平江区・滄浪区・金閶区の14.2km²である。

蘇州古城は長安や洛陽など他の歴史都市と同様、街



■写真1—船上から外城河の整備された護岸を望む



■写真2—春秋時代の古城遺跡「盤門風景名勝区」

路が東西南北を向き、周囲を長方形の城壁に囲まれていた。城壁沿いには外城河が環状に掘られ、京杭運河と城内運河を結んでいた。城門は、水門と陸門を兼ねた独特の構造になっており、築城当初は8門あったが、宋代には5門に減ったとされる。

このうち蘇州古城の玄閘口だった南西角の「盤門」は非常に有名である。この門は蘇州にある春秋時代の唯一の遺構で、現在は周囲を盤門風景名勝区として整備保存されている。

北西部の「閶門」周辺は商業の中心地であった。かつて中国では城内での商売が制限されることが多く、往来の激しい城門付近に自然発生的に市が立ち、商業区が形成される例がよく見られた。閶門周辺も、明代には月夜市といわれ、大いに賑わっていたそうである。酒屋や遊郭が軒を連ねる街を、城内の役人や商人がお忍びで出かける様が目に浮かぶ。また、閶門から外城河を跨ぐ橋は、ベネチアのリアルト橋と同様に、橋面に店が並ぶ複合建築で、如何にも商業区らしい景観である。

蘇州古城でもっとも特徴的なのは、城内を巡る運河と、並行する陸路の二重交通システムである。主要運河は縦4本横3本で、それぞれ城門と繋がっている。これら



■写真3—盤門からみた蘇州南部



■写真4—かつての蘇州の賑わいを感じさせる、たまたま出会った口ケ風景



■写真5—2004年開催の世界遺産委員会蘇州会議のために改築された閶門付近の橋



■写真6—北寺塔から蘇州市内を一望する 白壁に黒瓦の建物が多い

の運河を軸に、城内には碁盤目状の小運河と陸路が並行して張り巡らされている。現存する運河は半減し、往時の面影は保護区以外で見られない。

城内の運河の水深は平均2mと大船は通行できず、物資は小舟に積み換えて運ばれた。また、城内の運河の汚泥は外城河と同様、城外の農民が浚渫船で定期的に浚渫し、肥料として持ち帰った。

城内は行政庁の「府衙」を中心に東西南北の4ブロックにゾーニングされている。北西に高く南東部に低いことから、太湖と長江から外城河へと流れこむ水を、北の斉門や北西の閘門から入れ、北西部から南東部へと回し、南東の葑門や南西の盤門から再び外城河へ出すように設計されている。生活用水でもある運河の水を澱ませない工夫である。また、南東部は湿地帯で、籠城時の田畑の役目を果たした点は興味深い。他の3区画は、閘門のある北西部が商業区、盤門のある南西部が行政区、北東部が明代以降の新住民の居住区で自家庭園が多く、水郷都市の面影を色濃く残している。



■図2—南北に長い蘇州の住宅と運河のイメージ



■写真7—運河と並走する陸路



■写真8—橋詰め広場にある河橋と井戸



■写真9—運河の水で洗物をする女性

4—古城保護とインフラ整備

蘇州の魅力を活かすべく、運河と町並みの保護整備には多大な努力が払われている。水を城内に引き込み流れを蘇らせる「引」、汚水を処理する「截」、浚渫し水量を確保する「疏」、維持管理を強化する「管」、景観設計を行って水上観光を発展させる「用」の5字からなるスローガンのもと運河は整備されている。また、町並みの保護整備のために各種の規制が設けられている。白壁に黒瓦という色彩規制、蘇州風の建築様式の遵守、場所によって異なる建物の高さ制限などである。

5—往時を物語る平江歴史街区

蘇州では良好な環境を有する区域を歴史的保護地区に指定し、重点的に保護している。そのひとつ平江歴史街区は城内東北端に位置し、面積は約42ha、総延長2.25Kmの5本の運河と15の橋があり、江南水郷の特徴である「小さな橋・流れる水・人の住む家」を最も色濃く残している。世界遺産の古典園林「拙政園」や「獅子林」とも近く、観光客で賑わう場所である。

地区内の交通網や水路、住宅は、基本的に「一河一路」および「前街後河」になっている。「坊」と呼ばれる居住区が東西に長く連なり、一つ一つの坊は運河で囲まれている。坊の南側を運河と陸路が、坊の北側を運河が東西に走っている。中国建築では南側に玄関を作り、北側に厨房を配置するのが一般的である。そのため玄関前の運河と陸路は住宅へのアプローチに、北側の運河は生活のために利用している。

蘇州の住宅は間口の東西が短く、南北に長い独特の構造を持つ。間口は6～9mだが奥行きは80mもある。京都の町家と同様に「うなぎの寝床」になっている。玄関を入ると、客間、居住部、厨房(後房)があり、奥に進



■写真10—中国のあるくぐり門 四季折々の風景を切り取る



■写真11—北寺塔を借景とする蓮池

むほどプライベートな空間になる。そして後房の裏は再び運河である。こうしたユニットが東西に幾つも連なっている。裏手の運河には「河橋」と呼ばれる石の階段がある。炊事洗濯のためのもので、永く運河と共生してきた人々の暮らしの知恵である。

運河沿いの橋のたもとにある橋詰め広場は、かつての荷揚げ場で、船溜まりと河橋が併設されている。周囲には露店や商店が並び、今は使われていないが井戸もあり、集いの機能が強く、今でも人々の憩いの場となっている。

昔ながらの蘇州の住居にトイレはなく、木製のポータブル便器「馬桶」で用を足す。一日使用した馬桶は専門業者が洗浄するが、かつて運河で馬桶を濯ぐことも問題となっていた。現在は共同の馬桶掃除のスペースが作られている。

平江歴史街区に程近い拙政園(1997年ユネスコ世界遺産登録)は、明代1509年、官職を追われた地方官吏・王猷臣おうけんしんが、隠居の住まいとして作ったもので、友人で科挙の状元だった文徴明ぶんちやうめいが設計している。敷地面積は約5.2haと蘇州古典園林で最も広く、住宅部分と東園・中園・西園に分かれている。庭園の約6割は蓮池で、周囲の東屋・橋・回廊・緑が水面に映って美しい景観を醸し出す。回廊には「花窓」と呼ばれる透かし彫りの窓が366枚ある。同じデザインの窓は一つとしてなく、それぞれが景色を一枚の絵のように切り取ってみせてくれる。また拙政園は、蘇州のランドマークである「北寺塔」を巧みに借景に取り入れている。この景観を守るため拙政園と北寺塔の間の約1.5Kmでは建造物に高さ制限をかけている。

拙政園に限らず蘇州の園林はすべて私家庭園である。官吏や豪商、地主は、住居としてまた文人たちを招く邸宅として競って園林を築造した。清代末期(1616～1912年)には、大小数えて200もの園林があったという。

6—現代に蘇るか水郷都市

北部亜熱帯モンスーン気候に属する蘇州は、我々が訪



■写真12—それぞれ違った花模様の花窓

れた9月中旬が1年のうちでも最も過ごしやすい時期だそうである。橋詰め広場の欄干にのんびり腰をかける人々の姿に、時間が止まったような穏やかな印象を受けた。物流・交通手段として城内を流れる運河はその役目をほぼ終えたが、生活や憩いの場として水辺空間が果たす役割はまだまだ大きい。年間140万人が訪れる海外からの観光客にとっても、郷愁のある運河と町並みの雰囲気は魅力的だろう。

現在、蘇州市では運河の復元にも取り組んでいるという。歴史と自然が共生する活力ある文化都市に変えようとする蘇州市の今後の取り組みに期待したい。

<参考文献>

- 1) 中国の水郷都市 陣内秀信編 1993年 鹿島出版会
- 2) 中国名橋物語 武部健一著 1987年 技報堂
- 3) 中国の歴史都市 大西國太郎・朱煌編 2001年 鹿島出版会
- 4) 水辺から都市を読む 陣内秀信・岡本哲志編著 2002年 法政大学出版局

(写真提供:P14上、10、12、浅野泰弘
1、2、3、5、6、8、米岡 威
4、上野淳人
7、9、11、筆者)